

酒井潔他『理想——特集 ライプニッツ『モナドロロジー』300年』(理想社, 2013, 185頁)

林拓也

本誌はライプニッツの晩年の著作である『モナドロロジー』(1714)執筆300年を記念した論集であり、モナド概念に関連する12篇の論文が収められている。巻頭で酒井潔が述べるように、従来日本であまり扱われてこなかったライプニッツの神学に注目している点が特徴的である。そこで本書評では、まず、神と被造物の協働(*concurus*)という観点から神と世界との関係を論じる根無一信と田子山和歌子の2篇を主に考察した後で、他の論文を概略的に紹介する。

一つ目は根無の論文である。根無が解明を試みるのは『モナドロロジー』47節の「被造的な或いは派生的なすべてのモナドは神の産物であり、また、いわば神性の連続的な閃光放射(*Furguration*)によって刻一刻と神から生まれてくる」という主張に見られる神とモナドの関係である。まず、『弁神論』385節に依拠して、神の創造の働きが被造物の存在の開始の時のみならずその後のあらゆる瞬間において連続的に同じ強度であることが確認される。つづいて、「モナドは可能的世界においても現実世界においても常に可能的に自発的である」とされる。すなわち、現実世界のモナドは他のモ

ナドの影響を受けることなく、内在する力によってそれ自身で存在を続けることができる。同様に可能的世界においても、可能的なものの本質は、現実存在する神に由来することにより現実存在へと関係づけられ、自身に内在する完全性に応じて自発的に現実世界を目指す。しかし、根無によればこれらの自発性はあくまで未だ「可能的」なものにすぎない。これらの「可能的な自発性」が「現実的な自発性」になるためには、神がモナドに内在する完全性へ働きかけるということが不可欠である。このようにモナドの完全性はそれだけではモナドの現実的な自発性の根拠ではなく、「モナドが現実的に自発的であるならその背後には必ず神の働きが存在しているのである」。

神へのこのような依存性は、モナドが神に由来する完全性によって自発的存在でありうる可能性を得る点、そして神がモナドの完全性に働きかけることによりモナドが現実的に自発的な存在者でありうる点で二重である。しかし、神が「モナドの[現実的]自発性の条件であるだけでなくその可能性の条件でもある」というこの「絶対依存」にもかかわらず、モナドの自発性は消失せず、モナドはあくまでそれ自身で働くことに変わりはない。このようにして、根無によれば「閃光放射」の意味は、「モナドが「絶対依存」の構造において「それ自身」で自発的に神から生じ、存在し、働き続けること」であると理解されるのである。

以上の根無の議論は、神への二重の依存

とモノダの自発性を両立させる論理を明確に表現している。いくつか考察すべき点が残されているとすれば、それは「可能的に自発的」ということに関わるだろう。

まず、根無は可能世界においても現実世界においても同様にモノダが「可能的に自発的だ」とするが、両者を同様の意味で自発的だと解することができるかは問題である。神の知性において可能性としてある被造物と、創造されつぎの瞬間の新しい表象を欲求する被造物とのそれぞれにふさわしい仕方、「可能的に自発的」という言葉の意味が明確にされる必要があるように思われる(また、「潜在的に自発的」といった言い方の方が、誤解が少ないだろう)。

つぎに、「可能的に自発的」なものが神による完全性への働きかけによって「現実的に自発的」になるといふときの完全性への神の働きかけとは、より詳細にはどのようなことを意味するのか、読者としては気になるところである。

さて、田子山の論稿は、根無と同じく神と被造物の関係を問題としながらも、「保存説」・「機会原因説」・「協働説」という分類を利用しつつライプニッツの見解を見定めようとするものである。

田子山によれば、ライプニッツの神は「被造物に直接的な働きかけを行うことで、被造物の「存在」を保存するのみならず、その「はたらき」をもその都度実効化していく」。この「協働説」の立場は、「モノダの自律的なはたらきを徹底してみとめ」、各

モノダの自律的なはたらきの結果としてモノダ相互の調和が生じるよう予定されているという「予定調和説」と矛盾するように見えるという(例えばレッシュャーが矛盾を認めているとされる)。田子山が目的とするのは、ライプニッツ的な協働説と予定調和説の両立を示すことである。

そこでまず、上述の分類が提示される。各説は「ある」という意味での被造物の存在を神が連続的に創造しているという考えにおいては一致する。しかし、被造物の作用に関して、それを受動的とみるか(機会原因論)、創造後神は被造物の自律性に任せるのか(保存説)、それとも折衷的に、被造物の自律性と神の働きの直接性の両者を認めるのか(協働説)、各説で異なる。

そしてヴァイラーティの指摘にもとづき、田子山は奇跡理解の点で協働説は他の2説から明確に区別されるとする。すなわち、機会原因論と保存説の両者が奇跡を「被造物の本性に反する」と考える立場であるのに対し、協働説は「奇跡も被造物の本性も神の造ったものである以上、両者が相反するはずはない」とする。ライプニッツの協働説はこうした伝統的な協働説をさらに押し進めたものであるという。つまりライプニッツでは奇跡は神の特別な助力を必要とせず、被造物の本性から説明可能であり、その本性のうちに完全に回収されることになる。田子山によれば、このことが可能なのは、奇跡をも包括する一般法則が被造物の本性に含まれている、というライプニツ

ツの主張による。このように、創造後の神による再調整を不要とし、奇跡をも被造物の本性のうちに回収せしめるライプニッツの立場は、被造物の自律性に任せる保存説と異ならないように見える。だが、奇跡を被造物の本性に反するものだとするか否かにおいて両者は決定的に区別されるという。

田子山がつぎに取り組むのは、創造後の再調整が不要でありながら神の協働はいかにして行われるのか、という問いである。実際、『モナドロジー』における標準的見解では、モナドの先行状態と後続状態が「オーバーラップ」することで、状態同士は因果的な連続的關係にあり、状態変化はモナドの自律的なはたらきで説明可能である。ではなぜライプニッツは、モナドの各瞬間の状態産出を神の協働によらねばならないと考える(ソフィー・シャルロッテ宛書簡、1705年)のか。田子山はその答えを、被造物と協働する神が被造物同士の予定調和的關係の外にあり、無から存在を産出する創造者であることに見出す。つまり、「被造モナドが自律的に先行状態から後続状態を産出するという、予定調和の核になる思想は、創造—被創造關係という、予定調和的關係の外にある關係を前提にして初めて成立することになる」のである。最後に田子山は、神が突然協働を中止したら、という思考実験により、予定調和の秩序が創造者としての神を確かに前提としていることを確認し、二つの關係の連動を指摘することで論を終える。

以上の田子山の立論における中心的主張は、奇跡に関する見解の点で協働説を他の見解から区別する点、予定調和的關係の前提として創造—被創造關係を強調する点、(同じことだが)神による無からの存在の産出がモナドによる後続状態の産出活動を可能にするとみる点にある。

用語や、神への依存の一重・二重といった相違はありつつも、モナドの自律的な活動が神の協働を前提として成立すると解釈する点では、田子山と根無の結論は一致するとみることができる。

少し細くなるが田子山論文について残る問題点を挙げたい。まず表現について、「神の直接的な介入」は「再調整」から一応区別されるべきであろう。また、奇跡が「被造物の本性に完全に回収される」といった言い方をライプニッツ自身は認めないと思われる。そして、「保存説」、「協働説」、といった概念について、ここでの定義がそのまま当てはまらないようなケースが『弁神論』の中には見られることも事実である。

内容に立ち入れば、「伝統的な協働説」とライプニッツの協働説は奇跡理解以外の点で異なるところがあるのかどうか。そして一番争点になるのは、神の協働のあり方であろう。田子山の議論では、実質的には、モナドの自律的な活動・作用に対して神は直接的に協働するというよりもむしろ、「前提」という仕方で間接的に影響を与えると解釈されているように思われる。たしかに無から存在を産出する神の協働がなければ

モノダの活動もありえないとして、協働の不可欠性、根源性が強調されているものの、神が各モノダの個々の作用に対して直接的に協働するという点に十分言及がなされていない。しかしこの点はライプニッツにとって重要だったと思われる。むしろ「直接的 (immediatus)」で「特殊的 (specialis)」な協働がありながらも、神が罪の作者ではないことを物体の「惰力 (inertia)」の比喩などを用いつつ示すこと、それがライプニッツの弁神論の一課題だったであろう。以上の問題を残しつつも、これまで日本ではあまり取り上げられなかった協働というテーマについて、根無の論文とともに今後の研究を進展させることになるだろう。

その他の論文についても概略的にではあるが紹介したい。佐々木能章は、『モノダロジー』における、さまざまな視点から見られた「同一の都市」の「同一」の論じ方に注目し、「連続律と不可識別者同一の原理を用いて、人間の立場から「同一の都市」を導き出す可能性を探って」いる。

町田一は、単一性を表示するモノダを自存する単純実体としてライプニッツが規定しえたのはなぜかという問題を提起し、「分有論的枠組みを [...] 自明なものとして体得し、吸収していたからである」と結論する。

枝村祥平は、ライプニッツの前期から後期に至る、物体の位置づけの変遷を原典に即しながら丁寧に辿っている。

今野諒子はライプニッツのイタリア滞在

期 (1689-90 年) の運動論を詳細に記述し、ライプニッツ自然学の発展におけるその位置づけについて考察している。

長綱啓典は、精神＝「神の鏡」のうちに、「宇宙の鏡」のテオリア的性格にとどまらぬポイエーシスの性格を読み取り、『モノダロジー』と道徳哲学・政治哲学との関連を強調する。

酒井潔は、『モノダロジー』最終部の倫理神学思想が時世への迎合などではなく、当時の神学諸派との論争を意識し、「形而上学的最善説、反主意主義的合理主義神学の立場」を打ち出すものだったことを明らかにし、そこにおいて「一層普遍的な神学を再建せんとする試みであることが意識されていた」ことを示している。

山根雄一郎は、批判期のカントが「事柄としてのモノダ論の理解は、ヴァルヒヤブルッカーといった当代の文献の記述を手掛かりとした」と、資料にもとづき推測する。

中山純一は、フッサールによるモノダ概念の継承と展開を詳述している。

橋本由美子は、ドゥルーズに依拠しながら不共可能性や神の最善選択について考察している。

上野ふきの論文は、知恵の単なる集積ならぬ「集団知」形成の研究にモノダ概念を活用する手法を検討する新たな試みである。

全体として、酒井も述べるように、各執筆者の専攻領域が活きるものになっており、神学との関わりも含めてモノダ概念の射程の広さをよく描き出しているといえよう。